

内容紹介

福島県の東部・太平洋側（浜通り）にある広野（ひろの）町は、東京電力・福島第一原子力発電所（原発）からほど近く、原発事故や東日本大震災の津波などで大きな被害を受けた。だが、被災者向けの住宅を建設しようとする、予定地で遺跡が見つかる。当然といえば当然だが、土地は周辺より数メートル高い。「昔の人はこういうところに好んで住みます」。発掘などに携わった人たちの日々をたどる。

初出

朝日新聞 二〇一五年一月三日～一月三十日

※本文内の画像は、W E B用のものを転用しているため、解像度が低い場合がありますが、ご了承ください。

目 次

第1章	遺跡は残せたはずだ
第2章	恐竜の骨落ちたまま
第3章	ごちないコーヒー
第4章	いきなり実地研修
第5章	あかん、絶対ある
第6章	試掘した方がいい
第7章	あっても埋めちまえ
第8章	カンは外れていない
第9章	私で何とかして
第10章	遺跡はありました！
第11章	「阪神」のときの後悔
第12章	他ならよかったのに
第13章	ゴングが鳴った
第14章	泣かせてしもうた
第15章	発掘、やっぱやらんと
第16章	ここには味方がおる
第17章	柱は丸、穴は四角
第18章	そうか、駅家がある
第19章	「これ見て下さい！」
第20章	遺跡と建設は両輪だ
第21章	町が変わり始めた
第22章	出た！...また夢か
第23章	遺跡評価、運命の日
第24章	「一部保存」を決断
第25章	さよなら、帰るわね
第26章	1カ月早く終わった
第27章	目の色が変わった
第28章	「町を誇りに思う」

第1章 遺跡は残せたはずだ

茶色のくたびれたトートバッグを、白い自転車のかごにどっかと入れた。

目指すは福島県庁。

山本誠（やまもとまこと）（49）は福島市内のアパートから颯爽（さっそう）とこぎ出した。

2012年4月2日。東日本大震災から2度目の春を迎えていた。

山本は兵庫県教委の専門職員だ。埋蔵文化財の発掘調査をしている。

それが、この日から1年間、福島県教委で働くことになった。

復興事業に先立つて行う発掘調査を支えるため、派遣されてきた。

震災と埋蔵文化財――。

山本には苦い思い出がある。

阪神淡路大震災が起きた1995年。まだ駆け出しの5年目、29歳だったが、当時も兵庫県教委で、発掘調査にあたっていた。

工事の予定地に遺跡があるか。見つかった遺跡はどんなものか。

調べることは山ほどあった。

兵庫の職員だけでは手が回らない。県外からたくさんの職員を派遣してもらい、何とか乗り切れた。

でも、都市部を襲った大震災のときにふだん通り発掘していいのか。

遺跡が見つかって、復興が叫ばれる中、残したいと言えなかった。

結局、遺跡はすべて壊された。

山本は悔やんできた。

被災地でも遺跡を残せたはずだ。

あれから17年。

今度は山本が応援する番だ。

阪神大震災のときの恩返しをし、当時の反省を今にいかしたい。

やる気が全身にみなぎった。

ただ東北には縁もゆかりもない。

妻子を兵庫に置いての単身赴任。

通勤用の自転車は前日、近所のリサイクル店で手に入れた。税込み3150円。安さで即決した。

約15分で県庁に着いた。

新しい職場である文化財課は9階にある。丸いドアノブをつかみ、古びた扉を勢いよく開けた。

「おはようございます。兵庫県から来ました山本です。今日からよろしくお願いします」

通る声であいさつした。

だが職員たちの反応は鈍かった。

あれ？

拍子抜けして、あてがわれた机に座った。特に仕事の指示はない。

俺、何すんの？

福島での日々は、戸惑いからはじまった。

第2章 恐竜の骨落ちたまま

2012年4月。

兵庫県教委の山本誠（49）は福島へ派遣された。大震災の復興事業に先立つ発掘調査を支援するためだ。大阪生まれのバリバリの関西人。

年配の人が話す福島弁が、もごもご、ぼそぼそ、としか聞こえない。

仕事の打ち合わせをしても、しばしば聞き取れないことがあった。

福島は南北につらなる奥羽山脈と阿武隈高地で3地方に分けられる。

被害が深刻だったのは、太平洋に面した浜通り。津波被害に加え、福島第一原発の事故の影響を受けた。

それでも沿岸10市町のうち半分ほどが復興に動き始めていた。

連絡を受けては現場を見て回った。山本と同じ立場の派遣職員はいない。ひとりでこなすしかなかった。

山本は日誌をつけることにした。

天気、放射線量計の数値、打ち合わせの相手、内容……。その日思ったことを吐露する欄も設けた。

書き込む地名が増えていく中、なかなか出てこないところがあった。

広野町だ。

町全体が原発の20～30キロ圏にすっぽりおさまる。全町民約5500人に、町長の職権による避難指示が出されたが、山本が着任する直前の12年3月末に解除されていた。

いろんな工事が計画されているはずなのに、連絡が県に来ない。

埋蔵文化財に詳しい職員が全くいない。そんなことも聞こえてきた。

広野、大丈夫やろか――。

気をもんでいた4月下旬、ようやく電話があった。

運動場ほどの土地の開発が始まる。縄文時代の遺跡があるとされる地域なので相談したいという。

民間事業で、本来は山本の守備範囲ではない。しかし引き取って、さっそく向かうことにした。

県庁のある福島市から、高速道路を使って2時間あまり。乗り込んだ公用車の走行距離は20万キロを超えていた。途中で壊れないかヒヤヒヤしながら、アクセルを踏んだ。

広野町役場は3階建てだった。

正面玄関から飛び込むと、すぐ右手に東電の賠償受付窓口があった。

ロビーは吹き抜けで開放的な造りだが、薄暗く、ひっそりしている。

中央に高さ5、6メートルある恐竜の骨格複製があった。町の宝なのだろう。

でも、震度6弱の揺れに見舞われたからなのか、頭骨が床に落ち、転がったままになっている。

山本はそれを横目で見ながら、町教委をめざして奥の階段を駆け上った。

第3章 ゴチないコーヒー

頭骨が落ちたままの恐竜の骨格複製を横目に、山本誠（49）は広野町役場の階段を駆け上った。

「福島県から来ました山本です」

町教委の部屋に飛び込むと、入り口で声を張り上げた。

2012年4月27日。

大震災から1年が過ぎ、復興に動き始めた福島で、建設工事に先立って埋蔵文化財の発掘調査にあたる。そんな任務を背負って兵庫県から福島県に派遣されてきた。

広野町に来たのは、この日が初めて。縄文時代の遺跡があるとされる場所で開発計画があり、相談に乗って欲しいと言われ、飛んできた。

なのに、町教委の職員たちは、一瞬、顔を上げただけで黙っている。

あれ？ いぶかる山本に対応したのが、鈴木恵（すずきめぐみ）（36）だった。

色白で身長150センチちょっと。町でただ一人の文化財担当だ。

でも採用は一般職。町に文化財の専門職員はいない。だから県に相談した。

山本が名刺を差し出すと、鈴木は福島なまりの小さな声で「私、持ってないんです」と、ぼつり。

応接セットの書類を寄せて、山本が座れるようにすると、インスタントコーヒーを入れて出した。

山本はブラックのまますすった。

ゴチない空気が流れる。

復興って言っているときに、埋蔵文化財の担当者なんてやっぱり歓迎されんなあ。山本はそう思っていた。

しかし、鈴木は、全然ちがうことを考えていた。

コーヒーを出していいのか――。

広野町で生まれ育った鈴木にとって、山本は直接やりとりする初めての関西人だった。

発掘調査で真っ黒に日焼けしていて、声は大きく、身長は175センチある。自宅は遠く離れた兵庫という。

広野は原発事故で、町長職権の避難指示が出た町だ。すでに解除されたとはいえ、コーヒーなど迷惑ではないか。そんな気遣いをしていた。

だが山本は全く気にしていなかった。開発予定地を早く見たかった。

山本と鈴木は、そそくさと予定地へ向かった。

現地では開発業者が待っていた。田畑だったところを1メートルほど掘り下げてコンクリートで固め、重機の保守整備場にするという。

役場に戻ると、山本は今までの経験を踏まえ、遺跡の範囲を調べる場所を、図面に手早く書き込んだ。

調査は5月の大型連休明けにすることに決めた。

第4章 いきなり実地研修

大型連休が明けた2012年5月。兵庫県教委から福島県教委へ派遣されていた山本誠（49）は、再び広野町へ車を走らせた。

遺跡の存在が知られている地域で土地開発があり、現場に遺跡が含まれていないかどうか調べる。

福島に着任して初めての調査。

やっと出番がきた。発掘で復興に役立つぞ！ 大張り切りだった。

町教委の文化財担当、鈴木恵（36）とは現場で合流した。

ショベルカーと作業員も待っていた。山本も作業服にヘルメット姿でショベルカーの前に立つ。かたわらに鈴木も立たせた。

彼女は、たまたま文化財を担当しているだけ。発掘調査などしたことがない。地層の色の変化を見てピンとくることもない。

横に立たせて、自分のやり方を見せた。いきなりの実地研修だ。

この開発は地面を1メートルほど掘り下げて鉄筋コンクリートで固め、重機の保守整備場をつくるものだった。

山本は、図面をもとに8カ所の試掘坑を設けることにした。

ショベルカーの操縦士に指示して少しずつ掘り進め、目で確かめる。

2日間かけて調査。予定地に遺跡はかからないことを確認した。

調査後、鈴木はため息をついた。

「こんな開発がどんどん増えていきそうなんです」

福島第一原発の20～30キロ圏にある広野町は、町の避難指示が出たが解除されていた。このため作業員宿舎の建設など、いろいろ予定され、鈴木はどうすればいいか悩んでいた。

山本は去り際、言葉をかけた。

「何かあったら相談して。電話一本で来るから」

じっさい鈴木は頻繁に電話した。

「ほんまに電話一本で呼ばれると思わなかったわ」

苦笑しつつ、山本は週に1度は広野に飛び、鈴木と現場へ向かった。

「復習」にも力を入れた。

発掘調査のことは文化財保護法に定められている。震災後は早く円滑に調査するため、文化庁などが運用に関する通知も出していた。

その日の作業や打ち合わせは何を根拠にしたものか、法律や通知に蛍光ペンとふせんでチェックさせた。

山本の派遣期間は1年。帰任後も困らないようにするためだった。

鈴木は言われたことをノートにメモし、折に触れて読み返した。

だが、本当に遺跡を掘り当てることになるとは、このときはまだ思っていなかった。

第5章 あかん、絶対ある

兵庫県教委の山本誠（49）が広野町の発掘作業を手助けするようになって3カ月が過ぎたころだった。

2012年8月下旬。

町教委で文化財を受け持つ鈴木恵（36）から、また電話が入った。

広野町は津波と福島第一原発事故で二重の被害を受けた一方、町の避難指示が1年で解除され、復興に向けた前線基地のようになっていた。

いくつもの開発計画が立ち上がってくる。それに伴い工事に先だつ埋蔵文化財の発掘調査が必要になる。

文化財が専門外の鈴木は、開発計画を聞きつけるたび、電話やメールで山本に相談、指示を仰いだ。

いつものように電話を受けた山本に、鈴木は、とつとつと話した。

今度はまさに復興事業だった。

震災で自宅を失った住民のため、災害公営住宅を建設するという。

予定地は、海岸線から内陸約600メートルにあるJR広野駅のそば。

山本は「ん？」と思った。

町に通ううちに津波が到達した地域を教わっていた。

南北に走る常磐線の東側は海拔が低く、浸水した。

だが、その一角にありながら、小高い田畑だけは津波を免れていた。

住宅を建てるのは、どうやらそこらしい。

「面積は？」

山本は尋ねた。

「約1万5千平方メートルです」

「えーっ！」

山本は受話器を握りしめた。

津波をかぶっていない丘陵地。しかも、ものすごく広い。

いままでの経験に照らすと、こういうところには必ずと言っていいほど遺跡があった。

現場を確認せんと。

「すぐ行くわ」

県庁のある福島市から駆けつけた。町役場で鈴木が運転する公用車に乗り込み、案内してもらった。

一帯は肥沃（ひよく）な田畑だったという。だが、すっかり雑草に覆われていた。当時、作付けは自粛されていた。

山本がにらんだ通りの場所だった。周辺より数メートル高い。斜面を見下ろすと、低地は津波の痕跡があり、1年過ぎててもじめじめしていた。

「あかん、あかん」

山本の目つきが変わった。

「たぶん遺跡ありますよ」

電話を受けたときのカンは、確信に変わっていた。

「昔の人はこういうところに好んで住むんです。絶対ありますよ」

第6章 試掘した方がいい

土器の破片でもないやろか。

兵庫県教委から福島県教委に派遣されていた山本誠（49）は、足元に目を凝らしながら歩き始めた。

2012年8月29日。

広野町の丘陵地。

震災で住宅を失った人のため、災害公営住宅をここに建てる。

敷地は約1万5千平方メートル。

辺りは津波に見舞われたが、住宅の建設予定地は小高くなっているため、被害に遭わなかった。

こういうところには遺跡がある。

これまでの経験から、山本はそうにらんでいた。

遺跡がある場所には、土器などが地表にのぞいていることがある。

町教委の文化財担当、鈴木恵（36）とともに丹念に1周した。

東北といっても、夏の日差しは強烈だ。作業服の腰にぶら下げたタオルで、しきりに汗を拭った。

とくに何も見つからなかった。

でも、遺跡はある。

長年、発掘調査をしてきた者の独特の嗅覚（きゅうかく）が何かを嗅ぎ取っていた。

役場に引きあげると、災害公営住宅を担当している部署「復興建設グループ」を訪ねた。

山本は遺跡の有無を調べる試掘調査を提案した。

建設工事に入ってからだと、遺跡が見つかったも、建物の位置をずらすような変更が難しい。調査の人手や予算もすぐには確保できない。

工事前にあらかじめ調べた方が、建設計画を見直すことになっても対応しやすいし、調べる範囲を減らすことも考えやすい。

ところが復興建設グループは嫌がった。遺跡なんてないはずの場所を予定地に選んだ。だから発掘せずに急いで工事したいという。

早く建てる。何よりもそれを大切にしていた。

このころ、仮設住宅などの入居期限は14年3月末までとなっていた。

延長されなければ、自宅を失った人の住む場所がなくなってしまう。

行政として、何としてもそれまでに受け皿を作る必要がある。

スケジュールは逆算して立てた。

12年度からの約2年で用地買収から造成、住宅建設まで終わらせる。

できれば前倒しで工事を進め、少しでも早く入居までこぎ着けたい。

もつともな考えだ。急いで建てたい事情はよく理解できる。

でも、試掘した方がええのに。

山本は、もやもやしたものを抱えながら、鈴木とともに、町教委の部屋へ戻った。

第7章 あっても埋めちまえ

2012年8月29日、山本誠（49）は、もはややした思いを抱えたまま、広野町教委の部屋に戻った。町が計画している災害公営住宅の予定地を見てきた。兵庫県教委で培った経験とカンから、遺跡が眠っていると確信した。

まず試掘調査をしたい。

だが、町の復興建設グループには聞き入れてもらえなかった。そんな時間的余裕はない、というのだ。ソファに座り、自分で入れたコーヒーをすする。毎週来ているうちに勝手に分かるようになっていた。どうしたもんかな。

思案しているところへ、町長の山田基星（やまだもとほし）（66）が入ってきた。

次長の古市良彦（ふるいちよしひこ）（59）が「発掘調査の応援に来てくださっている、山本さんです」と紹介してくれた。

とたんに山田の顔色が変わった。

「広野に遺跡なんか、ねえ！」

山本は座ったままぼうぜんと見上げた。山田は大声で続けた。

「たとえあっても埋めちまえばいいんだ！ 来てもらわんでいい！」

言うだけ言って出ていった。

同席していた文化財担当の鈴木恵（36）はすくんだ。

発掘調査に詳しい職員が町にいない。その穴を埋めるために山本は来てくれている。なのに、どうして。

古市が取りなした。「気にしないでね。バンカラ系の人なんだよ」

山田が怒鳴った背景には、広野町が直面する厳しい現実があった。

東日本大震災で2人亡くなり、1人が行方不明のままになっている。

津波は内陸約1キロにまで及んだ。

震災時、山田は高台の町役場にいた。真っ黒な波が迫る前を男性が走っていたのを自分の目で見ている。

「早く逃げろ、逃げろおっ！」

窓越しに叫んだ。

ほどなく役場は電源を失った。

国からも県からも情報が来ない。翌日の夕方になってようやく自家発電機で電気がつく。テレビが福島第一原発の爆発を映していた。

山田は町民約5500人に町長の職権で、避難指示を発令した。

体育館、ホテル、仮設住宅や借り上げ住宅……。山田自身、着の身着のまま転々とした。

解除は約1年後。だが避難先からなかなか人が戻って来ない。

放射線への恐れだけでなく、帰りたくても家のない人がいた。

まずは住宅を建てねば。

そう考える山田にとって、山本は復興を遅らせようとしているとは思えなかった。

第8章 カンは外れていない

2012年8月30日。

山本誠（49）は2日続けて福島県広野町に向かっていた。

被災地で復興事業が相次ぐ中、工事に先がけて埋蔵文化財の発掘調査をするため、兵庫県教委から派遣されている。

前日は、広野町が計画する災害公営住宅の予定地を見にいった。この日は、復興事業の現場を視察にきた文化庁の調査官たちの案内役を任せられ、県内を回る中で、あらためて広野町も訪ねることになった。

町に着くと、教委へのあいさつもそこそこに、前日見た住宅予定地の丘陵をめざした。

山本は長年の経験とカンで、遺跡があると感じていた。

町教委次長の古市良彦（59）が同行し、工事の概要の説明をする。

話を聞きながら、山本は前日、町長の山田基星（やまだもととし）（66）から「遺跡なんか、ねえ!」と、怒鳴り上げられたことを思い出していた。

町にとっては今、一日も早い住宅の建設が何より大切なのだ。でも、ここにはきっと遺跡がある――。

山本は文化財調査官の近江俊秀（おおみとしひで）（48）に問うてみた。

「発掘調査していないから分かりませんが、どうですかね」

近江の答えは明快だった。

「うん、集落が存在している可能性がありますね」

やっぱり見立ては外れていない。自信がついた。

視察後、県庁へ連れていった。

近江たちは復興事業を遅らせないように、発掘調査を早く円滑に行うための助言をする立場にある。

打ち合わせで、今後の予算や態勢について意見してくれた。福島のために同じ方向を向いてくれている。心強く感じた。

ふと、町教委の文化財担当、鈴木恵（36）のことを考えた。

町には発掘調査に詳しい職員はいない。鈴木にとって頼みの綱は山本しかない。

自分が近江らに支えられているように、自分も鈴木を支えていこう。

このころ、鈴木は古市に相談を持ちかけていた。

住宅予定地には遺跡があるかもしれない。山本がそう言うからには、調べなければ。

そのための予算確保を頼んだ。

町の財政に余裕はない。それでも古市は、1回調べてみるができるだけの予算をひねり出した。

鈴木は山本へ電話した。「調査、お願いします」

第9章 私で何とかして

発掘道具一式を車に積み込んだ。

茶色い作業着にヘルメット。腰にはタオルをぶら下げて、山本誠（49）は広野町をめざした。

2012年9月11日。

兵庫県教委から埋蔵文化財の発掘調査の応援に来て半年弱。東日本大震災から1年半の節目を福島県で迎えた。

いよいよ、災害公営住宅の予定地に遺跡があるかどうか調べる。

現場はJR広野駅そばの丘陵地。約1万5千平方メートルもある。

手前に車を止め、歩いていった。

ぽつんとショベルカーが1台あるのが見える。かたわらに、町教委の文化財担当、鈴木恵（36）が作業着姿で1人立っている。

ショベルカーの操縦士もいるが、ほかに人影はない。

えっ、なんで？

山本はいぶかった。

地形を踏まえ、2メートル四方の試掘坑を6カ所設けることにしていた。

そのためには小さなショベルカー1台と、2、3人の作業員が要る。

その手配を鈴木に頼んでいた。

「作業員さんは？」

山本が問うと、鈴木はヘルメットをかぶった。

「すみません、重機を借りる予算しかなかったので、私で何とかしてください」

浜通り独特のイントネーション。声は相変わらず小さい。

でも、おとなしい鈴木が、腰に手を当て、胸を張っている。

意気込みだけは感じられた。

調査の予算は町教委次長の古市良彦（59）が工面してくれたが、10万円程度。ショベルカー1台を借りるのが精いっぱいだったらしい。

そう言われると、仕方ない。

ショベルカーの操縦士に言って、5～10センチずつ掘っていく。

雑草に覆われた地表から、黄色っぽい地層が現れた。

鈴木に土を削る道具を持たせた。

掘りあげた試掘坑の底面と壁面を1、2ミリだけ削り取って、きれいにしなすよう指示した。

「かつおぶしを削るように」

山本が手本を見せる。

腰を落とし、両手で道具を握る。力が弱いと地表が波打ち、強いと削りすぎる。加減が難しい。

悪戦苦闘する鈴木。

最初の試掘坑は何も出なかった。

ところが2カ所目は、黒っぽい土の帯が現れた。

山本は「おっ」と思った。人工的な溝の跡だ。

第10章 遺跡はありました！

黄色い地層に、黒っぽい土の帯が浮かび上がった。

2012年9月11日、福島県広野町。山本誠（49）はショベルカーの操縦士に掘削を止めさせた。

人工的な溝の跡だ。

町が計画する災害公営住宅の予定地に、遺跡があるのではないかと。そう考えて試掘調査をしていた。

約1万5千平方メートルのうち、地形を踏まえて2メートル四方の試掘坑を6カ所設けることにしていた。

「溝」は2カ所目から出てきた。

それを確認すると、ショベルカーでさらに掘るよう指示した。

今度は、土の間から赤っぽいものがチラリとのぞいた。

拾い上げた。葉脈の痕が残る土器の底の部分だった。

「縄文土器かな。コメ作りが始まったばかりのころの、弥生時代のものかもしれない」

そう言って、町教委の文化財担当、鈴木恵（36）に手渡した。

鈴木は目を輝かせた。

何もないと思っていた広野に、こんな遺跡があったなんて。

ほかの試掘坑からも、縄文時代の石製のおのなどが見つかった。最初に見つけた土器も、縄文時代のもものと見て間違いなさそうだと。

新たな遺跡の発見だった。

合間に、災害公営住宅の担当者たちがやって来た。

一帯は、これまで発掘調査が行われておらず、遺跡がある地域とはされていなかった。それもある復興建設グループは、試掘せずに早く工事に着手したいと主張していた。

「見てください」

山本は試掘坑の一つを指さした。

壁面に石製の矢じりが飛び出していた。捏造（ねつぞう）などと疑われないよう、そのままにしておいた。

それを地層から引っっこ抜き、住宅の担当者たちの前に突き出した。

「広野に、遺跡はありますよ！」

厳しい残暑も忘れていた。

調査を終えて、山本は鈴木とともに町教委へ戻った。

「ありました、やっぱり遺跡がありましたよ！」

応接ソファに座って、鈴木の上司、古市良彦（59）に報告した。

古市の目には、山本はニコニコ笑みをたたえてうれしそうに映った。

しかし、山本は内心「困ったことになったな」と考えていた。

復興事業のさなかに見つかった遺跡――。

阪神大震災のときの苦い記憶がよみがえっていた。

第11章 「阪神」のときの後悔

1995年1月17日、阪神大震災のことは忘れもしない。

兵庫県教委の山本誠（49）は明石市のアパートで被災した。

幸い、身重の妻と生後8カ月の長男は無事だった。

埋蔵文化財の発掘調査を行う専門職員。まだ5年目、29歳だった。

半日がかかりで神戸市の職場へ向かった。街の光景に絶句した。

このとき初めて、自分の仕事に迷いが生じた。

工事の予定地に遺跡がないか調べる。あると分かったら、壊さずにすむよう計画変更の道を探る。開発から遺跡を守る役割だ。

でも大災害を前に、そんなことしたら、あかんのやないか。

高速道路などを復旧しないといけな。壊れたり焼けたりした建物の建て替えも必要だ。

なにより仮設住宅が急務だった。

テレビや新聞は、避難所で何人ものお年寄りが亡くなっていると報じた。寒さなどが原因だ。早く住宅を建てないと犠牲者が増えてしまう。

復興事業は被災者の命に直結する。その前に発掘調査なんて。じつさい神戸市と芦屋市は異を唱えた。

山本は先輩たちと話し合った。

文化財は先人から引き継いだ大切な財産だ。何も調べないままなくしてしまっているのか。

悩んだ末、いつも通り発掘しようと決めた。

急いで調べ、工事に引き渡す。そのために全国の自治体から延べ121人もの職員を派遣してもらった。

貴重な発見もあった。だが、残したいとは言えなかった。見つかった約540件すべてが壊された。

のちに山本は悔いた。議論を尽くせば守れたかもしれないかった。

16年後、東日本大震災が起きた。

自宅のテレビで、押し寄せる津波の中継を見た。

自分の経験が役立つと直感した。

津波と福島第一原発事故で騒然としていた。そんな中、職場で95年当時の行政資料をコピーした。

上司らに訴えた。

「全国に助けてもらった恩を返さんと。そういうことがちゃんとできる人を派遣せんと、あきませんで」

職場ではいつの間にか、山本が派遣を志願したことになっていた。

行き先は福島。単身赴任をなじる妻をなだめ、2012年4月1日、福島市のアパートに入居した。

阪神のときのような後悔を福島の人にはさせたくない。そんな思いを胸に秘めていた。

第12章 他ならよかったのに

阪神大震災の経験を役立てたい。兵庫県教委の山本誠（49）はそう思って福島県へやって来た。

埋蔵文化財の専門職員。復興事業に伴う発掘調査が任務だ。

2012年9月11日、広野町の災害公営住宅の建設予定地に遺跡があるかどうか調べた。

多分あるとにらんでいたが、ずばり、遺跡を掘り当ててしまった。

あいつ、よけいなもん見つけやがって、て思われてるんやろなあ。

遺跡が見つかる「何も建てられない」「発掘調査が終わるまで、工事がすべて止まる」と受け止められることがあるからだ。

実際は少し違う。

場所をずらしたり、盛り土をしたりして破壊を避けられるのなら、本格的な発掘調査なしで開発できる。

調べなければならない場合も、工事と同時並行で行うなど、なるべく早く終わるような手法が取られる。

それでも抵抗感はぬぐえない。

「命より文化財が大事なのか」

ほかの地域では、集団移転先などにある遺跡がやり玉に挙げられた。呼応するように「復興の足かせ」とする報道もあった。

もちろん人命は何よりも大切だ。でも遺跡という先人が残した文化財は、壊せば二度と元に戻せない。

専門職員がいない広野町で、保護の立場から話ができるのは自分だけだ。山本は腹を固めた。もっと詳しく調べようと主張した。

一方、住宅の担当部署はこれ以上の発掘は不要だと考えていた。避難先から町に戻り、生活を立て直したい。そう願う町民のために、一刻も早い住宅の建設を求めた。

町教委の文化財担当、鈴木恵（36）は複雑だった。

歴史は幼いころから好きだった。初めて関わる試掘調査で縄文土器が出てきたとき、ワクワクした。

この場所に、どんな人が住んでいたのか。想像をかき立てられた。

でも、災害公営住宅はどうなるんだろう。そんな不安もわいた。

鈴木は代々続く自宅を津波で失った。水につかり、取り壊さざるを得なくなり、両親と夫、3人の子どもとともに、いわき市に移っていた。

帰る場所がほしいという町民の気持ちは痛いほどよく分かる。

復興と遺跡の板挟みに陥った。

ストレスで食べ物を受け付けない。みるみるやせた。同僚から「病気じゃないか」と心配された。

遺跡が他の場所で見つかればよかったのに――。

第13章 ゴングが鳴った

ゴングが鳴った。

2012年10月19日、広野町役場の会議室で、山本誠（49）はそう思った。

発掘調査による文化財の保存と復興事業との調和。それを役目に兵庫県から福島県に派遣されている。

1カ月ほど前、町の災害公営住宅の予定地で遺跡を掘り当てた。遺跡の存在が確認された以上、工事前に本格的な調査が必要だ。

その説明に町役場にやって来た。

だが、長机をはさんで向かい合う面々を見てうなった。

復興事業に携わる主要メンバーがずらりと並んでいる。

山本の隣には、10月になって新たに他県から福島へ派遣された職員2人がいた。でも着任したばかりで事情が分かっていない。

町教委の文化財担当、鈴木恵（36）は机の短い辺に1人で座った。

どちらにもつかず、ノートを取っていた。

そもそも、と相手は切り出した。

「復興事業なのに、なんで掘らないといけないんですか」

早く建てたいからって、調べないまま工事を強行するつもりか。

阪神大震災のときと同じだ。

復興を急ぐ神戸市と芦屋市は発掘調査に異を唱えた。だが両市とも、いつも通り調べた。

もどかしかった。

この場で文化財を生かした街づくりを説いても伝わらないと感じた。

山本はあえて強い言葉を放った。

「この国は法治国家でしょ。文化財保護法の手順にのっとって、ちゃんとやりましょうよ」

建てたい。調べたい。

平行線のままエスカレートした。

開発推進側は不満をぶつけた。

「被災地の苦労を分かってない！ よそから来た人には、震災復興なんて関係ないんだから」

山本も身を乗り出した。

「私は阪神・淡路大震災を経験してます！ 被災地の事情、よく分かっているつもりです」

だったらなおさら、と受け止めたのか、怒気まじりの声が飛んだ。

「発掘調査で、復興事業を遅らせる気ですか！」

終始、沈黙していた鈴木が顔を上げた。メモを取る手がいつの間に止まっていた。

「この人たちは、そんな思いで来てるんじゃないですよっ！」

役場中に響くような大声だった。

色白のほおがあかく染まり、瞳から涙があふれていた。

第14章 泣かせてしもうた

この人たちは、そんな思いで来てるんじゃないですよ――。

広野町教委の文化財担当、鈴木恵（36）が怒りをあらわにした。

2012年10月19日、災害公営住宅の予定地で見つかった遺跡をめぐる打ち合わせの場だ。

引き金は、工事担当者の発言だった。

「発掘調査で、復興事業を遅らせる気なのか！」

山本誠（49）への言葉を、鈴木は聞くに堪えなかった。

山本は福島復興事業にさきだつ埋蔵文化財の発掘調査を支えるため、兵庫から派遣されている。

そんな人が遅らせようなんて思うわけがない。なのに、こんなひどいことを言うなんて。

頭に血が上って思っていることがうまく言葉にならなかった。涙が止まらず、顔を覆って席を立った。

男たちはぼうぜんと見送った。

けんか腰で相手と対峙（たいじ）していた山本は、我に返った。

恵さんを泣かせてしもうた――。

普段の彼女はおとなしい。声も小さい。浜通り独特の方言で、はっきりしゃべることもない。

そんな鈴木が感情をむき出しにした。

一同は落ち着きを取り戻した。

山本も復興事業の担当者たちも、立場は違えど悔いのない行政をしたいという気持ちは同じだ。

お互い冷静に話していこう。そう言ってこの日の協議は終わった。

根本英俊（ねもとひでとし）（56）は協議の報告を受けて、山本へ言いつのつた同僚の心情がよく分かった。

住宅の建設事業を担当する「復興建設グループ」のリーダーだ。

一番大事なのは、今を生きる人だと思う。

当時はまだ、多くの町民が仮設住宅や借り上げ住宅に暮らしていた。

入居期限は14年3月末まで。もし延長されなければ、地震や津波で自宅を失った町民を路頭に迷わせてしまう。

だから急いで災害公営住宅を建てなければならない。厳しい工期を組んだのはそれゆえだった。

遺跡が見つかったからには、本格的な発掘調査が必要なことは重々承知している。

いつまでも平行線でいてはらちがあかない。

被災者のために歩み寄ろう。

実はこのころ、発掘調査に最も否定的だったある人物も、考えが変わり始めていた。

第15章 発掘、やっぱやらんと

「また、来てんのか」

広野町長だった山田基星（やまだもとほし）（66）は苦々しく思った。役場で兵庫県教委の山本誠（49）を見かけたからだ。

山田の家業は建設会社だ。浜通りの方言は荒っばいが、一本気で親分肌。それゆえに原発事故後は、町民の行く末を背負っているとの一念で走り続けてきた。

2012年3月31日、町長職権で出していた避難指示を解除した。

年末までには全員に戻ってもらおうと考えて復旧・復興を進めていた。

その矢先、山本が顔を出すようになった。兵庫県から福島県へ派遣されているという。しかも「町の災害公営住宅の予定地に遺跡がある」と騒いでいるらしい。

あの住宅は復興の第一歩だ。よその人間が勝手なことと言って、邪魔する気か。顔を見るのも嫌だった。

遺跡より、多くの町民が戻ってこないことの方が気がかりだった。

唯一あったスーパーは再開しないまま。五つあった病院も減った。

一方で原発事故対策の前線基地となり、帰還した町民の倍の勢いで作業員が千人も2千人も増えていた。

一度バラバラになった町で、青写真を描きなおすのは難しい。

法を無視してでも、早く災害公営住宅を建てねば――。

いつでも辞表を出す覚悟だった。

自宅は地震で崩れたが、広野に戻ってきていた。

張り詰めた日々の中で山田を癒やすのは、長年連れ添った初江（はつえ）（64）の顔を見ながらの晩酌である。

あれはいつの夜だったか。季節は秋になっていた。

いつものように大好きな日本酒の一升瓶を取り出した。コップに氷を浮かべてグビリとあおる。

腹に染み渡る酒のうまさを味わいながら、2人の孫のことを思った。

ゆうか（12）と、あさか（10）。震災前は町に住んでいたが、いわき市の避難先から車で1時間ほどかけて町立広野小へ通う。登校前に山田のもとで、一緒に朝食を食べる。

息子3人の子育ては初江に任せきりだったが、孫にはメロメロだ。

あの子たちが町の歴史を学んだら「広野っていいね」と思うだろう。

ふと、そんな考えがよぎった。

ふるさとの文化は、町への愛着も育てるだろう。町民に帰ってきてほしいなら、遺跡を埋めて住宅を建てるのは逆なんじゃないか――。

翌朝、山田は職員に言った。

「発掘、やっぱやらんとな」

「桜田4遺跡」

福島県広野町の災害公営住宅予定地で、兵庫県教委の山本誠（49）らが見つけた遺跡は、地名にちなんでこう命名された。

町に埋蔵文化財に詳しい職員はいないが、年に数件、周辺の自治体などから応援を得て調査はしていた。

桜田地区では、平成に時代が変わった1989年ごろの調査で、三つの遺跡が見つかった。

今では三つとも記録に残っているだけだが、今回は4番目となる。

町長だった山田基星（やまだもとほし）（66）が同意したこともあり、発掘調査は実施されることになったが、町内でも珍しくない、縄文時代を中心とする遺跡の一つぐらいに見られていた。

一方で、山本は心の余裕を失いつつあった。

福島県で行われる復興事業に先立ち、遺跡の有無や範囲を調査する。それが山本の任務であり、そのために復興庁福島復興局へ復興交付金を申請しようとした。

ところが、担当者に理解してもらえない。工事前になぜ調べなければならないのか、と言う。

「復興交付金は税金ですよ！ あなた、分かってますか！」

公務員同士なのに、そんな言葉まで浴びせられた。

福島県教委内でも行き詰まった。

復興に関する仕事は、山本やほかの自治体から派遣された職員に割り振られていた。県の職員は通常業務。阪神大震災の経験を伝えたいと思っても、できなかった。

2012年11月末。

山本は、気晴らしにNHK大河ドラマ「篤姫（あつひめ）」の中古のDVDを買った。26平方メートルの家具付きアパートでビールを飲みながら見た。

篤姫は薩摩生まれで徳川13代将軍・家定（いえさだ）の正室。幕末の動乱を生き、江戸城を無血開城へと導いた。

挿入曲「正鵠（せいこく）」の旋律が、運命を切り開いてゆく篤姫を思わせた。

篤姫も見知らぬ土地でがんばったんやなあ。

テーブルに兵庫の職場でもらった送別の造花を飾っていた。黄色い花卉を見て「ここには味方がおる」と思うと、涙がポロポロこぼれた。

心が折れるってこういうことかと思った。

山本の状態を知った旧知の仲間がカンパを集め、一人が訪ねてきた。

JR福島駅前の居酒屋で飲んだ。愚痴をこぼしながらの日本酒の味は覚えていないが、ありがたかった。

気持ちしが前を向いた。

第17章 柱は丸、穴は四角

年が改まった。

2013年1月21日、福島県広野町で発掘調査が始まった。

災害公営住宅の予定地から見つかった「桜田4遺跡」を詳しく調べるのだ。

浜通りは雪が少ない地域だが、西に連なる阿武隈高地から、冷たいから風が吹き下ろす。

兵庫県教委から福島県に派遣されている山本誠（49）は、冬用の作業着に加えて、紺のジャンパーを着込み、パッチをはいた。

首の後ろには使い捨てカイロ。ぶ厚い靴下も3足重ねた。

それでも寒い。でも心は燃える。

調査範囲は計約3800平方メートル。

年末から年明けにかけて、表土10センチ分をはぐ除染作業を終えている。

全体を17区画に区切り、調べ終わったところから造成工事へ回す。

造成も発掘作業の重機や人の手配も、地元の建設会社「西本建設」が請け負った。

社長の息子で技師の西本久雄（にしもとひさお）（38）は、予定地の南側から工事を始めたいと希望した。

南側は急斜面なので、まずはセメントで固めて壁を造りたいという。

そこで発掘は、この斜面に近い二つの区画から始めることにした。

山本は町の発掘調査に技術協力するという立場だ。

前年10月に青森県教委から福島へ派遣されている野村信生（のむらのぶお）（44）も加わった。

最初は南北に細く延びる区画。野村がショベルカーの前に立つ。

数十センチ掘ったあたりで、竪穴住居（たてあなじゅうきょ）の跡が出土した。続いて、かまどの跡や掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）が見つかった。

掘立柱建物というのは、地面に穴を掘って柱を立てた建物を指す。

ほかに溝の跡もあった。そこからは、ろくろを使った土器など奈良～平安時代のものが出土した。縄文時代の遺跡と思っていたが、どうやら古代のものも含まれるようだ。

5日目、二つ目の区画に移る。

ここには3DKの集合住宅が建つ予定だ。30センチも掘り下げないうちに、さっそくまた掘立柱建物の跡が出てきた。

黒々とした、柱を立てた跡が整然と並ぶ。山本と野村は表面をきれいにならした。

柱そのものは丸い。それなのに、柱を立てるための穴はわざわざ四角く掘られている。

2人とも「あれ？」と思った。

それは、古代の公的機関の建物に見られる特徴だった。

第18章 そうか、駅家がある

2013年1月25日、広野町。

町の災害公営住宅予定地の発掘調査をしていた山本誠（49）と、野村信生（44）は顔を見合わせた。

予定地で遺跡が見つかり、それがどんなものか詳しく調べはじめて5日目に、丸い柱を立てるための四角い穴の跡が出てきたのだ。

山本は兵庫県教委の専門職員で、福島県へ派遣されている。四角い柱の跡は関西の現場でよく見ていた。古代の公的機関の特徴だ。

でも、東北は違うかもしれない。

青森県教委から来ている野村に聞いてみた。

「三内丸山（さんないまるやま）遺跡って、こんな穴ある？」

青森市にある日本最大級の縄文集落。直径1メートルを超す巨木を使った大きな掘立柱（ほったてばしら）建物跡などが見つかっている。野村なら詳しいはずだ。

「いやあ、ないですねえ」

あっさり否定された。

2人ともはじめは縄文時代の遺跡だと思っていた。でも、この柱の跡は「古代だよなあ」。

もやもやしたまま、この日は金曜日で官舎のある福島市へ帰った。

月曜日からの調査で疲れている。週末は体を休めよう。そう思ったが、柱の跡が気になった。

日曜日、朝早く起きるとインターネットで広野町を検索し始めた。

昔の航空写真なら、開発される前の地形が写っているかもしれない。

1961年の写真を見つけた。調査現場の北東に、正方形の溝で囲われた区域が写っていた。1辺は100メートル前後あるように見える。

山本の経験に照らすと、奈良時代の役所の遺跡は100メートル四方の溝で囲っていることが多かった。

この区域のさらに北東には、基盤目状に区画した古代の耕地「条里（じょうり）」がある。山本は続けて広野町のホームページを開いた。町の成り立ちを紹介する文の最後に、こうあった。

「続日本紀」の養老3年（719年）の条には「石城（いわき）国始めて駅家（うまや）一十処を置く」とあり、その一処がこの地に置かれた可能性も考えられます――。

そうか、駅家だ！

山本はひらめいた。

駅家とは古代の国営道路沿いにあり、乗り継ぎの馬や食料、宿などを提供していた公的機関だ。

あの柱の跡は、駅家に関係するに違いない。仮説を立てると、県立図書館で駅家に関する本を借りた。

月曜日はこれを携えて広野町に行くのだ。

第19章 「これ見て下さい！」

「あそこは駅家（うまや）なんですよっ！」

兵庫県教委の山本誠（49）は興奮していた。

2013年1月28日。

福島県広野町教委の部屋で、応接ソファに座ると、前日の日曜日、県立図書館で借りてきた本を開いた。

「これっ、これっ、これ見てください！」

次長の古市良彦（59）に向けて見せた。文化財担当の鈴木恵（36）も古市のわきから、のぞき込む。

9世紀後半の復元模型が載っていた。離宮や国府などが並ぶ一角に、古代の国営道路に置かれた公的機関、駅家が写っている。

京都府大山崎町の歴史資料館が作製したものだ。

「こんなの、もう少し小さいのが、広野にもあったんですよ！」

山本がまくし立てるので、ほかの職員2人も集まってきた。

災害公営住宅の予定地から見つかった桜田4遺跡は、駅家に関する建物だ――。前日ひらめいた見立てを披露した。

「墨で『馬』などと書かれたものが出ないと、確定できませんよ」

青森県教委から派遣されている野村信生（44）が冷静に指摘した。

だが、山本の勢いは止まらない。

「町のホームページにも、駅家について書いてあるんです」

山本は印字したものを示した。

「えーっ！」。町教委の面々も驚く、埋もれた歴史だった。

山本たちの支援を受けて発掘調査にあたってきた鈴木は、ワクワクしてきた。

広野に、そんな歴史があったなんて。よく分からないけど、とにかくすごいものが見つかったんだ。

発見された当初は、工事の計画と発掘調査の調整がまとまらず、見つからなければとさえ思った。

でも、山本の話の聞いていると、ロマンが広がってくる。もつとあの遺跡のことを調べたい。

山本は鈴木の机上にある受話器を手にとった。

文化庁記念物課の文化財調査官、近江俊秀（49）に電話した。

「いつ広野へ来られますか」

近江は、復興事業に伴う発掘調査が円滑に進むよう助言する立場だ。

なにより、飛鳥・奈良時代の道に詳しく、著作もある。

それで、この遺跡が駅家に関係する建物かどうか評価してもらおうと考えたのだ。

来町は2月14日と決まった。

第20章 遺跡と建設は両輪だ

広野町の桜田4遺跡で見つかった遺跡は、駅家（うまや）に違いない――。

確信を胸に、兵庫県教委の山本誠（49）は発掘現場に向かった。

2013年1月末。

調査は2週目に入り、柱を立てた四角い穴の跡のそばに、黒々とした溝の跡も出てきた。

山本はいつそう喜々とした。

奈良時代の公的機関は周囲を溝で囲う特徴があるからだ。

西本久雄（38）を呼び止めた。

「大変ですよっ！」

西本は、父親が経営する地元の建設会社「西本建設」の社員。住宅用地の造成工事とともに発掘作業も請け負っている。

「どうしました？」と尋ねる西本に、山本は興奮して話した。

「ここはきつと駅家に関係する建物ですよ。奈良時代の役所で、続日本紀にも記述が残ってるんです」

駅家？ 広野がそんなものと関係があったのか。西本には想像もしないことだった。

町への思いは人一倍あると自負している。

広野町は、原発事故で、全町民に町長職権による避難指示が出た。西本も東京へ逃れた。しかし約半月後、父と広野町にある自宅へ戻る。

町などから復旧工事の協力を要請されたからだ。

十数人いた社員にも意思を確かめてから参加してもらい、がれきの撤去や下水道の修復などにあたった。

役場から支給されたのは、線量計1個と防護服2着、普通のマスクくらい。正直、不安だった。

それでも町にとどまったのは、住民が戻るための仕事だったからだ。

ところが今回、造成工事に先がけて発掘調査をするという。

建設業からすると遺跡は対極のイメージだ。開発中に見つかると、工事が止まってしまうと思っていた。

でもちょっと違った。

早く工事したい区画から調べてもらえるし、終われば造成に入れる。

何より発掘作業も意外に楽しい。

次々に土器片が出土し、コンテナがいっぱいになる。

西本は次第に、それらの時代や製法を山本に聞くようになっていた。

かまど跡の脇に座り、奈良時代のリビングを想像したこともある。

沈んでいく夕日を眺めるのは格別だった。昔の人と同じ光景を見ている。そんな思いが胸にあふれた。

考え方も変わっていた。

遺跡は建設の対極じゃない。復興の両輪なんだ。

第21章 町が変わり始めた

災害公営住宅の予定地から、すごい遺跡が出たらしい。

2013年2月。広野町でこんなうわさが瞬く間に広まった。

いったいどんな遺跡なのか。住宅は建てられるのか。

関心は一気に桜田4遺跡へ集まった。

町議会はマイクロバスで視察にやって来た。

兵庫県教委の山本誠（49）が手書きの図面を載せた資料を配った。

派遣されている福島県教委の立場で発掘調査の技術協力をしている。

柱を立てた跡が整然と並ぶ調査区へ、町議たちを案内した。

遺跡を示しながら話し始めた。

「今回は奈良時代、8世紀のものとみられる建物跡が密集して見つかりました。『駅家（うまや）』に関する施設だと考えられます」

駅家とは、都から地方へ張り巡らされた国営道路「官道」沿いに約16キロごとに置かれた古代の公的機関だ。

官道は緊急時の通信をはかることなどを目的に整備されている。

そこへ設けられた駅家は、馬の乗り継ぎや食料の提供、宿泊所も備えた重要な施設だった。

続日本紀には、現在の浜通りを含む地域に10カ所設けたとある。

だが、東北で駅家の遺跡は見つかっていない。

官道が浜通りのどこを通っていたかも、ほとんど分かっていない。

桜田4遺跡は、古代の道の歴史をひもとく大きな手がかりになる。

熱い思いが山本の説明にこもっていたらしい。

遺跡を見た町議たちは「すごい」「保存できないか」と口にした。

門馬巧（もんまたくみ）（70）もその一人だ。立派な遺跡を壊すのはもったいないなあと思った。

町長だった山田基星（もとほし）（66）を訪ね、もちかけてみた。

「遺跡のメイン部分だけでも残せないか」

山田はとくにこたえなかったが、すでに何か考えているようだった。

門馬が委員長を務める産業厚生常任委員会でも、遺跡と災害公営住宅はどうなるのか、との質問が出た。

町執行部は答えた。

「文化庁の遺跡評価を聞いて決定します」

文化庁記念物課の文化財調査官がほどなく訪れる。その評価次第で、建設予定地を含め、大幅な変更もありうることを示した。

復興だけ見ていた町が、変わり始めていた。

第22章 出た！…また夢か

あった、とうとう見つけた！

地中から土器の破片を拾い上げる。墨で「驛」と書かれている。飛鳥～平安時代に置かれた公的機関「駅家（うまや）」と同じ意味の漢字だ。

やっぱり、駅家があったんや！

喜んで土器を胸の前に掲げた——というところで目が覚める。

2013年2月上旬。

山本誠（49）は毎晩、こんな夢にうなされていた。

復興事業に先立つ発掘調査を支えるために兵庫県から福島県へ派遣され、広野町で「桜田4遺跡」を発見した。

調べるうちに、駅家に関する8世紀ごろの建物だと考えるに至った。

しかしそれは、駅家を意味する文字が記された土器や木簡があつて初めて立証される。

奈良時代の土器は大量に出土していた。でも、文字が記されたものは一つもなかった。

遺跡は、災害公営住宅の予定地で見つかったものだ。

駅家かどうかあいまいなのに、発掘で建設を止めていいのか。

寝付けない。眠りに落ちれば「驛」の土器が夢に出る。それは、もともとの勤務先、兵庫県立考古博物館の展示品にあったものだった。

発掘調査にあたりながら、阪神大震災のことが脳裏に浮かんだ。

被災時は兵庫県教委に入って5年目。復興班に所属し、発掘調査を行うための調整役などを務めた。

平時なら保存されるような貴重な発見もあったが、記録しか残らなかった。

後で山本は思った。

壊せば元には戻せない。後世への責任をとまうということを、どこまで考えて判断したのか――。

だから広野町の人々には、これからの街づくりに桜田4遺跡をどう位置づけるか考えたうえで、残すか壊すかを決めてもらいたかった。

そのためによく調べ、専門家にも問い合わせて判断材料を集めた。

このころ、住宅の担当部署「復興建設グループ」の根本英俊（56）もある準備を進めていた。

縄文時代の遺跡だと思ったら予想外の遺構が見つかった。調べると、駅家と推定されているほかの遺跡はだいたい現地保存しているらしい。

遺跡を残したいという声の広がりも感じていた。全面保存と一部保存の場合をにらみ、予算や事務手続きなどのシミュレーションを重ねた。

文化庁の遺跡評価の日が近づいていた。

第23章 遺跡評価・運命の日

運命の日がやって来た。

2013年2月14日、広野町の「桜田4遺跡」。

災害公営住宅の予定地で見つかったものだ。

発掘調査の指揮は、兵庫から派遣された山本誠（49）が執った。公的機関「駅家（うまや）」に関連する8世紀ごろの建物跡だと仮説を立てた。

本当にそうなのか。

それを評価するために、文化庁記念物課の文化財調査官、近江俊秀（49）が現場を訪れていた。

山本や町教委の古市良彦（59）らが案内する。

近江は足早に発掘現場を見て回った。

やがて口を開いた。

「奈良時代の大事な遺跡です」

そして続けた。

「駅家に関係する建物の可能性を秘めています」

山本たちは「ホントですか!」と身を乗り出した。

役場に戻り、古市は教育長だった芦川鋭章（あしかわとしゆき）（67）に遺跡評価について報告した。

同席した近江は言った。

「保存についての方法は示せません。でも、災害公営住宅という性質上、記録保存もやむを得ません」

遺跡を残すかどうか判断するのは、あくまで地元の権限だ。

近江はそれを支える国の立場として、全面保存と一部保存、文書での保存という三つの選択肢を示した。

淡々と話しながらも、被災地にはひとかたならぬ思いを寄せていた。

宮城県石巻市に生まれ育った。

震災で甚大な津波被害に見舞われた地の一つだ。

今回の遺跡は復興事業に関わっている。

だからこそ、広野町が自ら保存するかどうかを判断しなければ、町の将来に禍根を残すと考えていた。

町教委は決めた。

災害公営住宅だから、遺跡を全部残すのは現実的ではない。

ただ、駅家の関連施設と見られる遺構の主要部分だけでも、保存したい。

芦川は言った。

「遺跡をなくしちゃったら、後世の町民に対して申し訳ねえ。後で怒られっど」

近江も応じた。

「震災の復興と埋蔵文化財の調和は、こういう時代だからこそ大切なんじゃないですか」

町教委の意向を携え、古市は町長室へ向かった。

第24章 「一部保存」を決断

2013年2月14日、広野町教委の古市良彦（59）は町長室に入った。

災害公営住宅を担当する根本英俊（56）らも一緒だ。

町長だった山田基星（もとほし）（66）とともに応接セットに腰掛けた。

住宅の予定地で見つかった建物跡は、どんなものなのか。

古市は、文化庁記念物課の文化財調査官、近江俊秀（49）の遺跡評価を報告した。

「奈良時代の遺跡で、『駅家（うまや）』に関係する建物の可能性があるそうです」

そして続けた。

「町教委としては遺構が集中する主要部分を保存したいと思います」

根本は図面を広げた。

1月末に建物跡が見つかったから、遺跡の保存を見越してシミュレーションを練っていた。

遺構が集中している場所は、3DKの集合住宅を建てる予定だった。

その脇に、公園を作る区画を用意していた。ここに遺跡はない。

「集合住宅と公園を入れ替えば、保存できます」

黙って聞いていた山田は、まなじりを決した。

腹は固まった。

「遺跡を保存しよう」

復興事業を進めながら埋蔵文化財の保護もはかる――。

これまでにない取り組みだ。

古市は町教委の部屋に戻った。

近江や文化財担当の鈴木恵（36）、技術協力をしてきている派遣職員の山本誠（49）と野村信生（44）が待ち構えていた。

目をまん丸に見開いて伝えた。

「町長、保存するって」

歓声があがった。

その晩、鈴木と山本、野村、近江の4人はJRいわき駅前の居酒屋で乾杯した。地酒と海鮮が自慢の、こざっぱりとした店だ。

鈴木はずっと復興事業と遺跡保存の板挟みになっていた。これまでやってきたことが認めてもらえて、うれしかった。

それも山本たちが支援してくれたおかげだ。感謝の気持ちを込めて、3人にバレンタインチョコを渡した。

山本は1年前の4月に着任したときからの出来事を振り返った。

はじめは遺跡の有無を調べることさえ迷惑がられた。その町が、保存を決めるなんて。

この日の日本酒はうまかった。BGMに流れるジャズのリズムが心地よく、酔いしれた。

第25章 さよなら、帰るわね

災害公営住宅の配置を変え、住宅の建設予定地で見つかった「桜田4遺跡」の主要部分を保存する。

そのための補正予算案などが2013年3月、福島県広野町の定例町議会に提案された。

町長だった山田基星（もとほし）（66）は提案理由でこう述べた。

「埋蔵文化財との調和を図りながら早期完成を目指してまいります」

異論を唱える町議は誰もいなかった。議案は全会一致で可決された。

発掘調査を支えてきた兵庫県教委の山本誠（49）は感慨深かった。

任期は3月末まで。

はじめは復興を急ぐあまり、町に遺跡なんてない、と言われた。

ところが、住宅の予定地で見つかったものを残すまでに至った。

遺跡は、復興の壁ではなく、過去と現在を結び、未来へ後押しする宝物。そう思ってくれたのではないか。

少しは俺も役に立てたかな。

3月26日、山本にとって最後の発掘調査の日。

あらためて現場を見渡した。

面積約3800平方メートル。

遺構を保護するために、すべて青いシートで覆われている。

まるで地上にあらわれた海のようなだった。

かたわらで満開の白梅が香った。

手持ちのカメラに収めた。

あとは引き継ぎをするだけだ。

翌日、後任を連れて、町教委を訪れた。

文化財担当の鈴木恵（36）らに紹介した。

5月に住民向け現地説明会を行うことを決め、打ち合わせも終えた。

「さよなら、帰るわね」

鈴木らに手を振ると、役場をあとにした。

福島県への1年間の派遣。

埋蔵文化財の専門職員がいなかった広野町を助けただけではない。

体制づくりを提案したり、阪神大震災などの経験を生かして国や市町村との調整役を務めたり。

困ったときは、福島で出会った人たちが力になってくれた。

初めての単身赴任も、妻や子どもたちが支えてくれた。おかげで無事に乗り切れた。

派遣を経て、改めて仲間や家族とのつながりの強さを実感できた。

毎日つけていた日誌の最後にこう記した。

「福島県へ支援に行くことができて、感謝」

山本の帰任後も、町は引き続き桜田4遺跡と向き合う。

第26章 1カ月早く終わった

2013年4月、広野町。

町教委の鈴木恵（36）は身の引き締まる思いがしていた。

町の文化財担当だが、専門外。

兵庫県教委から派遣された山本誠（49）に助けられてきた。

しかし山本は3月いっぱいまで帰任した。その教えを記したノートを手元に、いよいよ独り立ちする。

懸案は、町の災害公営住宅予定地で見つかった「桜田4遺跡」。住宅を建設するのと同時に、遺構を一部保存する。

発掘調査はまだ途中で、鈴木だけでは進められない。

不安を和らげてくれたのは、兵庫県教委が2年連続で福島県へ職員を派遣してくれたことだ。甲斐昭光（かいあきみつ）（51）。山本の職場の先輩で、引き続き広野町をみてくれるという。

茨城県教委の作山智彦（さくやまともひこ）（39）も加わった。山本と発掘にあたっていた野村信生（44）が半年の任期を終えて青森へ帰任。その後任となる。

新しい年度に、新しい顔ぶれがそろった。

のんびりしてはいられない。住宅の建設は完成まで1年3カ月はかかる。それを考えると、発掘調査は6月中に終わらせないといけない。

対象は約3800平方メートル。どう早く終わらせるかが課題だった。

作業員は通常の態勢の倍以上、最大で1日に約40人も入れた。

さらに心強い味方も加わった。

奈良文化財研究所（奈文研）だ。

国内屈指の考古学の研究機関。最新技術と専門家が集まる。

より迅速な調査ができるよう、文化庁が協力を要請していた。

奈文研が復興に伴う発掘調査を手がけるのはこの時が初めてだった。

その技術力がものをいう。

手作業なら数人がかりで1週間かかる区画の測量が、レーザーで地形を読み取る装置により、半日で済んだ。高所から撮影できる機材もあり、足場を組む手間が省けた。

けっきょく、調査は目標より1カ月も早い5月末に終わった。

奈良〜平安時代を中心に、少なくとも掘立柱（ほったてばしら）建物12棟、竪穴住居7棟などの遺構が確認された。

古代の土器などは30リットルのコンテナ29箱分にのぼった。縄文時代の土器や石器も出土した。

ただ残念ながら、山本が夢に見続けた、奈良時代前後の公的機関「駅家（うまや）」の関連施設だという証拠は見つからなかった。

夢は子どもたちに託される。

第27章 目の色が変わった

五月晴れの中、子どもたちの歓声が上がった。

2013年5月、福島県広野町の桜田4遺跡。

遺跡が見つかった災害公営住宅の予定地で、町立広野小と広野中の発掘体験が行われた。

町長だった山田基星（もとほし）（66）は朝、孫のゆうか（12）とあさか（10）を小学校へ車で送り届けた。

そのとき言い聞かせた。

「遺跡、よく見てきなよ」

発見された当初は復興の妨げのように見ていたが、いつしか遺跡を通じて町の歴史を心に刻んでほしいと願うようになっていた。

広野中の渡辺守（わたなべまもる）（49）は担任する2年生を引率した。

社会科の教諭。授業では、町に奈良時代のころの公的機関「駅家（うまや）」があったかもしれないと話していた。

桜田4遺跡はそれに関係する建物跡の可能性がある。発掘体験は貴重な学習の機会になる。

ただ、町は福島第一原発の30キロ圏にある。子どもを連れ出すことに、ためらいがあった。

しかし、現場は除染も済んでいるという。両校とも、保護者に可否を尋ねたうえで実施した。

中学2年の渡辺金四朗（わたなべきんしろう）（14）は体操服に体操帽姿ではしゃいでいた。

「絶対掘り当ててやる！」

友だちとそんなことを言い合いながら現場へ歩いていった。

小さなスコップなどが配られた。

発掘担当の職員が地面の黒っぽいところを指す。溝の跡だ。

「ここは色が違うでしょ。少しずつ掘ってみましょう」

10分もしないうちに、女子生徒が500円玉大の石のようなものを見つけた。ねずみ色がかっている。

「石ですか？」

「いえ、土器のかけらですね」

職員の言葉に、金四朗たちの目の色が変わった。みんな夢中で地面を削りだした。

教諭の渡辺には、授業で聞かせた町の歴史を、子どもたちが実感し始めているように見えた。

子どもたちは感想文を書いた。

「広野町にこんな遺跡があったなんて思ってもいなかったので、とても誇りに思います」

「もっとこの町のことについて知り、詳しく説明できるようになってみたいです」

故郷への思いにあふれる言葉が並んだ。発掘体験に込めた大人たちの願いをしっかりと受け止めていた。

第28章 「町を誇りに思う」

2014年9月、福島県広野町の災害公営住宅は完成した。

鍵の引き渡し式に代表として出席した鈴木（すずき）すみ（49）は被災後、5回も住居を移した。

鍵のレプリカを受け取り、ほほえんだ。「これでやっと落ち着ける」

同じころ、町は初めて学芸員の資格をもつ職員を正規採用した。

住宅予定地に桜田4遺跡が見つかり、町は考え方を変えた。文化財保護の観点から事業を見る職員も復興には欠かせない、と。

その学芸員が根本環（ねもとたまき）（26）。町出身で東京の大学で考古学を学んだ。

さっそく住宅地周辺の発掘調査などに関わっている。

町はすでに調べた部分のうち約750平方メートルを埋め戻して保存した。のちに公園として整備する予定だ。

町の未来はどうなるのだろう。

町立広野小の6年生は14年末、将来の町の地図を作った。

水族館、遊園地、大型商業施設……。手製の模型を地図に並べた。

今までにないものが欲しい。考えていくうちに思い出した。5年生のとき桜田4遺跡で発掘体験をした。

そうだ、町には「歴史」がある。

柱の跡をガラス張りで展示したい。クイズ形式で解説できる施設だと、小さい子でも楽しい――。

構想をA4 25枚の計画書にした。

鈴木恵（36）は、この授業を伝え聞いてうれしかった。

専門外ながら町教委の文化財担当として発掘調査に携わった。

14年春の異動で児童福祉の担当になった。今でも折にふれ、発掘体験した子どもたちの言葉を思い出す。

「遺跡がある町を誇りに思う」

復興をめざす一人として、この言葉に励まされてきた。

職責を全うし、子どもたちに明るい未来を引き継ぎたい。そんな思いが、より強くなった。

兵庫県教委の山本誠（49）は福島派遣中に入った福島県考古学会に、帰任後も所属している。福島に関わり続け、復興を見届けたいからだ。

阪神大震災から20年を迎え、講演する機会が相次いだ。

阪神と東北。二つの震災の発掘現場を知る者として、経験を伝える責務があると思っている。

広野町のことは必ず触れる。

原発事故に翻弄（ほんろう）されながらも、文化財に新たな街の姿を見いだした人々のことを。

著 者 朝日新聞（山田菜の花）

発行所 朝日新聞社

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com/>

発売所 朝日新聞社デジタル本部

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com>

2015年3月12日 WEB新書版発行

2015年12月31日 EPUB版発行

©2015 The Asahi Shimbun Company

All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

ISBN 978-4-86612-617-3

〈ご注意〉本コンテンツは、購入者個人の閲覧目的のためのものです。私的範囲を越える利用・譲渡などは禁止します。

〈おことわり〉本コンテンツは2015年3月12日に刊行されたWEB新書版を底本としました。EPUB版の刊行にともない、体裁や表記を直した場合があります。企業、組織などの名称、人物の役職、肩書等はいずれも記事初出当時のものです。